トラベル懇話会　7月例会レポート

「不確実な国際情勢と日本」

赤阪清隆氏
元国連事務次長

世界の不安定さや不確実さが新型コロナやウクライナ危機によって増大。未来の不透明さは増すばかりです。このような時代に日本と日本人はどうあるべきか。7月の例会では、多くの国際機関で活躍し世界を知る赤阪清隆氏が、いまこそ海外へ飛び出し多くの日本人が外から見た日本を知るべきだと説き、そのために大きな役割を担う旅行業界にエールを贈って下さいました。

すでに日常を取り戻した欧州

昨年8月と今年3月にヨーロッパの数カ国を訪れましたが、現地の人々のマスク姿は見かけませんでした。マスクをしているのは私のようなヨーロッパ域外からの観光客だけ。新型コロナによる感染者比率も死亡者比率も日本より数倍も高いのに、ヨーロッパ域内の旅行客が大挙して旅行を楽しんでいましたし、各国はほぼコロナ前の日常を取り戻していました。

日本からの旅行者である私も、ワクチン接種済みの条件をクリアするだけで入国も簡単でした。ところが問題は日本への帰国でした。PCR 検査で陽性が出れば帰国便に搭乗することができず、現地での隔離生活を余儀なくされるリスクがあります。まさに「行きは良いよい帰りは恐い」状態です。これでは日本人が海外旅行に消極的になるのも無理はありません。

中国の世紀もアジアの世紀も来ない

パンデミックの影を引きずる世界では、不安定さと不確実性が増しています。Volatility（変動性）、Uncertainly（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取

った VUCA WORLD なる状況が生まれつつあるとも言われます。今年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻は5カ月目に入り、国際秩序の崩壊や第三次世界大戦、核戦争の可能性までが取り沙汰される状況です。加えてパンデミックの行方もまだ不透明で、リーダーなきいわゆる G ゼロの世界の出現と米中の覇権争いの先鋭化も不安定さを増す要因になっています。さらに AI やロボットなど技術革新の加速やバイオテクノロジーの進化が社会にどのような影響を及ぼし、気候変動とその抑止努力が世界をどう変えていくのか。不確実な要素が多く5年、10年先の見通しが立てにくい状況です。

国連は昨年の特別総会で現下のグローバル

な重要課題をリストアップしましたが、ウクライナ危機や米中対立、パンデミック、イランの核開発などリストは何十項目にも及びました。いったいこの先の世界はどうなってしまうのか。米国の政治学者、イアン・ブレマーは著書『G ゼロ後の世界－主導国なき時代の勝者は誰か』でグローバル・リーダーシップが存在しない世界を想定し、米国の大学教授であるチャールズ・カプチャンはアメリカの世紀でも中国の世紀でも、アジアの世紀でもない、どの国の世紀でもない 21 世紀のありようを「NO ONE'S WORLD」と表現しています。さらにハーバード大学教授のグラハム・アリソンは古代ギリシャ時代の覇権国家スパルタと台頭する新興国家アテネとの間に起こったペロポネソス戦争の史実になぞらえ、トゥキュディデスの罠にはまった米中が戦争の危機にあると説いています。

狂騒の 20 年代は再現されるのか

コロナ禍は人々の人生観を変えました。いつ死ぬのか分からない状況に直面し、人生はため込むものではなく、生きるためのものとの認識が広がり、人々は人生で何が一番大事なのかを考え直しました。新型コロナが去った後も別の感染症が起きると考える人が増え、コロナ禍は人種問題や貧困問題など社会の不正義を暴く結果にもつながりました。一方でコロナ禍はテレワークの普及といった形でイノベーションのエンジン役も果たし、科学的知識の重要性も示しました。

そしてアフターコロナの 2020 年代は、スペイン風邪後の 1920 年代に訪れた「狂騒の 20 年代」が再現されるとの見方があります。実際にコロナ下で抑制されていた消費意欲が一気に解放されリベンジ消費が始まり、米国では旅行熱が爆発しています。また第一次世界大戦後の 1920 年代に自家用車やラジオといった革新的な新商品が大流行したように、2020 年代も AI、IOT、ブロックチェーン技術など新技術による革新的な商品やサービスが出現し消費を変える期待もあります。

次に来るのはどのような世紀なのか。世界的なベストセラーの著者で歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは「人間の能力をはるかに超える AI と生物工学が、これまで人間が作り上げた政治、経済、社会制度を無用の長物と化す。次に来るのは、データの世紀だ」と予言しています。実際に我々のスマートフォンのデータからは、持ち主の趣味嗜好や思考方法、行動履歴、人間関係などまで読み取ることが可能で、たとえばスマホのデータが結婚相手を決めてくれる時代はすぐそこまで来ています。

中国の世紀は来るのか。中国は 2028 年に米国の GDP を追い越すと見られ中国の世紀が訪れると見る向きもありますが、中国の少子化を加味して、2050 年代には再び米国が中国を追い抜くという説も最近では有力視されています。

そのような世界における日本の重要課題は何か。それは安全保障、少子高齢化、経済力の低下、グローバル思考の欠如、エネルギー危機や食糧危機、環境危機といった危機感の欠如、そしてグローバル・リーダーシップの欠如だと考えます。

これらの課題の背景にあるものとして心配な日本人の特性が、慎重すぎる日本人の国民性や、小さな幸せを求める日本の若者の考え方です。ワクチン接種後に海外旅行をするかを尋ねる調査で、海外旅行するとの回答が日本人は他国に比べ圧倒的に少ない結果でした。日本人の完ぺき主義的な発想の悪い面が出ています。パンデミックの完全収束を待つのなら何十年たっても海外旅行はできません。白か黒かで真っ

白になるのを待つのが日本人なら、ヨーロッパの人々は人生を白か黒かで考えずに灰色の世界を受け入れます。「この世は白と黒ではなく灰色の世界が続いている」というのが彼らの言い分なのです。

マイルドヤンキー化する若者たち

小さな幸せを求める日本人の若者を象徴するのがマイルドヤンキーです。地元の半径 5 ㎞から出たくない、遠出はしない、仲間と群れるのが好き、「絆」や「家族・仲間」といった言葉が好き、ミニバンに乗っていくショッピングモールが大好きなのが特徴です。

日本の若者は気候変動に関する活動への共感が少なくグレタ・トゥンベリさんに「共感する」比率は約 30%と他国より低く、「海外で働いてみたいと思う」のは約 12%にすぎません。「留学してみたい」は中国がほぼ 100%、韓国が 60%なのに対し日本は約 30%と圧倒的に少ない。「40 歳くらいになったとき、世界で活躍していると思うか」に対して「そう思う」と回答した比率は欧米各国が 30%台前後、韓国も 24%なのに対し日本は約 10%に留まっています。

不確実性が高まる世界で、未来を担う日本の若者たちに課題へ挑戦してもらうには、まずは世界を知り課題を知ることで日本の強みも知り、使命感を持って取り組んでもらわねばならず、そのための能力を養う教育が必要となりますが、そこでは前提として世界に飛び出す勇気が大必要です。

日本は多くの課題を抱えますが、世界からは課題先進国として日本から学ぼうという流れも生まれています。また日本が世界に貢献できる分野も多く、健康・長寿や省エネ・再エネ、気候変動対策などの分野がそれに該当します。

小さくまとまりがちな日本の若者ですが、「国のために役立つと思うようなことをしたい」と答える比率は日本が約 55%で欧米の主要各国や韓国を大きく上回ります。やる気はあるのです。

こうした使命感が新たな創造のパワーも生み出します。日本製品が「安かろう・悪かろう」と言われ、ファション界でも相手にされなかった 1960 年代に、ニューヨークやパリで大活躍し日本人デザイナーここにありを鮮やかに示してみせた森英恵さんはかつて日経新聞のインタビューで「日本人には、世界に先駆けて様々な問題に取り組むべき宿命がある。そうした強い使命感が新たな創造のパワーを生み出すのではないかと思う」と語っています。

英国の詩人、ラトヤード・キップリングは「イングランドにしか住んでいなくて、イングランドの何が分かるというのか」という言葉を残しています。私はこの言葉の「イングランド」を「日本」に置き換えて日本人に訴えます。この言葉からも分かるように旅行の仕事は国の未来にとって大変重要な役割を担っています。是非とも多くの国民、若者たちを日本や世界の各地に連れて行って、少しでも日本人の国民性を多様性と柔軟性のあるものに変えていく努力を続けていってほしいと期待しています。

＜Profile＞

あかさか・きよたか●1948 年大阪府生まれ。京都大学、ケンブリッジ大学卒業。1971 年外務省入省。2000 年に国連日本政府代表部大使を務める。その前後には 1988 年に GATT（WTO の前身組織）事務局、1993 年に世界保健機関（WHO）事務局、2003 年に経済協力開発機構（OECD）事務次長と国際機関で活躍し、2007 年から 2012 年までは国連で広報担当事務次長を務める。2012 年から 2020 年までフォーリンプレスセンター理事長。